

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

系群名 根室海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

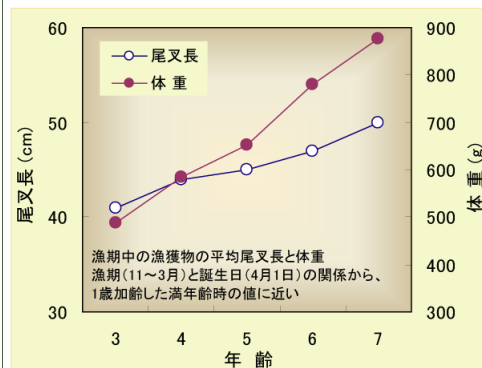
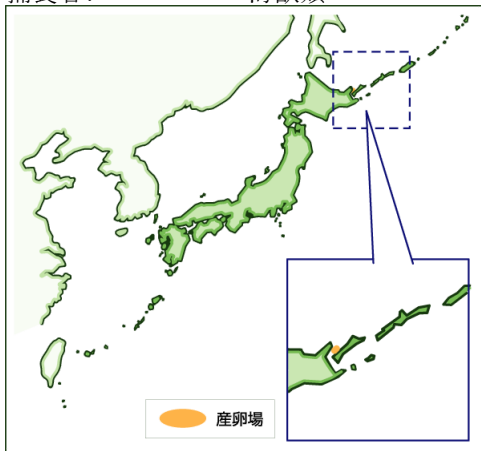
寿命: 10歳以上

成熟開始年齢: 3歳

産卵期・産卵場: 冬季(1~4月)、根室海峡

索餌期・索餌場: 初夏~秋季、オホーツク海と推測されるが未解明の部分が多い
食性: オキアミ類、カラサス類をはじめとする浮遊性小型甲殻類、本海域では、冬季に魚卵および魚類を捕食している個体が多い

捕食者: 海獣類

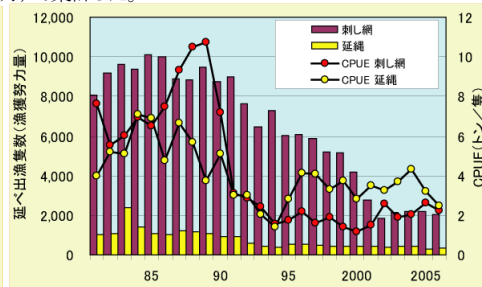
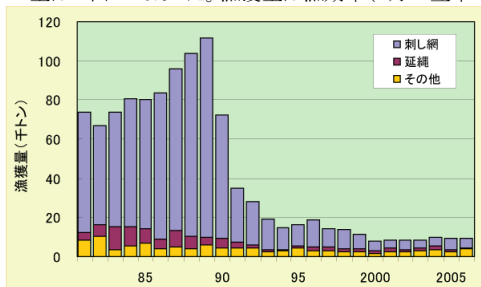


漁業の特徴

本海域のスケトウダラは、主として刺し網および延縄によって漁獲される。操業期間は、延縄漁業が12~1月、刺し網漁業が1~3月である。漁獲対象とするのは、産卵のために来遊した群である。刺し網漁業では1980年代中頃から資源保護の目的で、97mm目合の網を用いており、漁獲物の尾叉長の範囲は約40~60cm、モードは50cm前後となっている。近年、刺し網漁業は「ブロック操業」を導入して、操業の省力化を行っている。

漁獲の動向

漁獲量は、1989年度に過去最高の111千トンに達したのち急激に減少し、1994年度には15千トンまで落込み、その後も低迷を続け、2000年度には過去最低の8千トンとなった。2006年度の漁獲量は9千トンであった。1986~1992年度には、ロシアのトロール船団が、本海域周辺において15千~172千トンの漁獲をあげた。近年では、2005年の漁獲量は1千トンであった。漁獲量は漁期年(4月~翌年3月)で集計した。

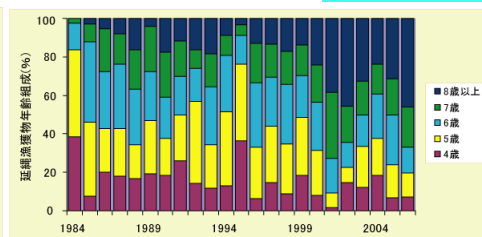
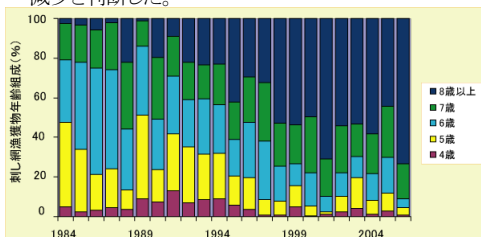
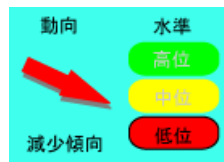


資源評価法

日本漁船による漁獲量とCPUEの情報はありますが、根室海峡中間ラインより国後島側の漁場では漁法の全く異なるトロール漁船による操業が行われており、この操業実態が不明のため資源解析は難しい。しかし、利用できる資料が他には無いため、ここでは、日本側の情報(日本漁船による漁獲量やCPUEの推移、漁獲物組成など)を基に、これまで得られているロシア側の情報を考慮して資源状態を推定した。

資源状態

操業形態の変化などにより、刺し網漁業と延縄漁業の近年のCPUEをそのまゝ過去の値と比較することは困難な状況になってきている。漁獲量は、1989年度のピーク時の1割を下回る低水準で低迷しており、資源状態は良くないと推測される。また、漁獲物年齢組成では、近年、延縄漁業の4歳魚(新規加入)の比率が減り、刺し網漁業の8歳以上の高齢魚の割合が増加傾向を示しており、加入状況は悪化していると推測される。1981~2005年度までの漁獲量の変動範囲において、2006年度の9千トンは低水準である。また、過去5年間の漁獲量は、横ばい傾向を示しているが、加入状況の悪化が懸念されており動向は減少と判断した。



管理方策

本海域に分布するスケトウダラについては、若齢期の情報やロシア水域での分布と回遊の情報もなく、資源と漁獲の関係を検討することは難しい。しかし、本海域のように狭い海域で、産卵群を対象に漁獲を行えば、その効率は索餌期に比べれば高いと考えられ、資源に全く影響を及ぼさないとは考えにくい。産卵親魚の保護という観点からすれば、漁獲量のほとんどが産卵親魚であり、その漁獲量が最大時の1割を割り込むような状況では、何らかの回復のための措置を考えるべきである。本年は、資源動向が横ばいから、減少に悪化したと判断した。そこでABClimitは過去5年間の漁獲量の平均値×0.6、ABCtargetはABClimit×0.8とした。

漁獲のシナリオ (管理基準)	管理の考え方	2008年漁獲量	F値	漁獲割合	評価
ABClimit (0.6Cave5-yr)	漁獲圧を減らして 資源の回復を図る	5.4千トン	—	—	—
ABCtarget (0.8・0.6Cave5-yr)	上記の予防的措置	4.3千トン	—	—	—

資源評価のまとめ

- 操業形態の変化や規模により、刺し網や延縄のCPUEを資源量の指標値とみなせなくなっている
- 漁獲量はピーク時の1割以下で低迷しており、資源水準は低い
- 漁獲物年齢組成から、加入状況の悪化が示唆される
- 漁獲量は横ばい傾向を示すが、加入状況の悪化から、動向は減少と判断

管理方策のまとめ

- 資源の回復のためには、現在より漁獲水準を引き下げることが必要
- ロシア側の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシア側もTACを設定して漁獲規制を実施している

資源評価は毎年更新されます。